

ていました。そして、とんぼが、かなたの圃はたけの上うえを飛とんでいるの
が見みえたばかりです。

私わたしは、退たい屈くつでしようがなかつたのです。このとき、遠とおくでチ
ヤルメラの音おとが聞きこえました。私わたしは、飛とびたつように勇ゆう気きづけら
れました。いくらそのおじいさんが無ぶ愛あい想そうでも、ずつと昔むかしから
この村むらにくるので、まったくの顔かおなじみであつたから、けつして
他人たにんのような気き持もちがしなかつた。そのそばへいって、屋や台たいにさ
してあるいろいろな色いろ紙がみで造つくられた小旗こぼたの風かぜになびくのを見みた
り、チヤルメラの音おとを聞きこうと思おもいました。また、きつとよそか
らも、友ともだちがそこへ集あつまつてくるにちがいないと思おもつたので、
私わたしは、さつそく駆かけだしました。

城跡しろあとのところに行きますと、いつもおじいさんが屋台やたいを下ろす場所ばしょに屋台やたいが置いてあります。そこからチャルメラの声こえが聞こえてきました。そして、今日きょうはいつもより、紫むらさき色の紙かみの小旗ぼたがたくさんにちらちらと見えみましたので、早くはや変わった光景こうけいをながめたいと走はしって行きました。

すると、それは、いつものおじいさんじゃありませんでした。私わたしは、このはじめて見るおじいさんを不思議ふしぎに思おもいました。おじいさんは、こつちを向むいて、にっこり笑わらっていました。そして、私わたしがだんだん不思議ふしぎに思おもいながら近ちかづくとき手招てまねぎをしました。そのおじいさんの顔かおは、白しろくて目めが光ひかっていました。私わたしは、このおじいさんが、いつものおじいさんと異ちがって、愛あい嬌きようがあるのに

もかかわらず、なんとなく気味悪く思いました。

「さあ、おいでよ、おいでよ。」と、おじいさんはいいました。

私は、自分一人だけで、ほかに友だちがなかつたから、あまり屋台には近寄らずに、離れてぼんやりと立っていますと、

「ここまでくると、おもしろいからくりを見せてやる。さあさあ早くおいで、一人のうちはお錢をとらない。さあさあ、早くおい

で。」と、おじいさんはいいました。

私は、からくりを見たさに、だんだんと近寄っていききました。

「さあ、その孔からのぞき。第一は姉と弟とが、母親をたずねて旅立つところ。さあさあのぞき。一人のうちはお錢を取らない

。」

わたしは、わたし 屋台やたいにかかつている箱はこの孔あなをのぞいてみました。すると、
旅姿たびすがたをした姉あねと、弟おとうとの二人ふたりが目めに映うつつたのであります。

「つぎは、途中とちゆうで、二人ふたりが悪者わるものに出であうところ。」
と、おじいさんがいって糸いとを引ひきますと、青あおい、青あおい、海原うなばらが
見みえて、怖おそろしい姿すがたをした悪者わるものが、松まつの木の蔭かげに隠かくれて、かな
たから歩あるいてくる二人ふたりのようすをうかがっていました。

これから、どうなることだろうと思おもっているうちに、おじいさ
んは孔あなの中なかを真まつ暗くらにしてしまいました。

「さあ、これから二人ふたりが、人買ひとかい船ぶねに乗のせられて沖おきの島しまへやられ
るところ、もつと先さきまでいくと見みせますよ。さあ、いつしよにお
いでなさい。」と、おじいさんは屋台やたいをかついで、お城しろの中なかへ入はい

つていきました。

わたしは、悪者わるものが、姉あねと弟おとうとをどんなめにあわせるだろうと思おもうと、かわいそうになつて、ついそれが見みたくて、あめ売うりの後あとについていきました。あたりはまつたく圃はたけで、人ひと一人ひとり通とおらなかつたのであります。

不意ふいに、おじいさんは屋台やたいを下おろすと、私わたしを捕とらえました。私わたしはびっくりして声こゑをたてる暇ひまもなく、おじいさんは私わたしの口くちに手てぬぐいを当あて、ものはいえないようにして、

「いいところへ連つれていってやるから、おとなしくして、この箱はこの中なかに入はいっているのだ。」と、私わたしを箱はこの中なかへ入いれてしまいました。それをついでおじいさんは、とつとと途みちを歩あるいていきました。

狭い、身動きもできないような真つ暗の箱の中に押しこめられて、私はしかたなくじつとしていました。おじいさんは、どこを通っているのかわかりませんでした。その後はチャルメラも吹かずに、さつさと歩いていました。

「あんまり、一人で遠くへゆくと、人さらいに連れられていつてしまう。」といった、祖母や母親の言葉が思い出されて、私は、しみじみ悲しくなつて泣いていました。

おじいさんは、どこをどう歩いているのだから私にはわかりませんでした。だいぶ長い間歩いたと思う時分に、おじいさんは屋台を下ろしました。そして、箱の中から私を外に出しました。このときよく見ると、おじいさんの顔は、まったく気味が悪いほど

いろしろ色が白く、目が光っていました。私はいつも村にやってくる無愛想な、あめ売りじいさんを思い出して、どれほど、その人のほうがいいかshれないと思ひました。

「さあ、なんにも怖いことはない。私といつしよにくるのだ。」と、おじいさんは、屋台を木の下に置いたまま先に立つて歩きました。私は、そこがどこだか、ちつともわかりませんでした。さびしい山の間で、両方には松の木や、いろいろな雑木のしげった山が重なり合っていました。そして、ただ一筋の細い路が谷の間についていました。

おじいさんについて、どんなところへ連れていかれるのかと心配しながら歩いてゆくと、はや、せみの松林で鳴いている

声こえが聞きこえました。日ひが暮くれたら、どうなるのだらうと思おもうと、もう一ひと足あしも歩あるく気きになれなかつたけれど、路みちがわからないので逃にげ出だすこともできなかつたのであります。お母かあさんや、おばあさんが、私わたしをたずねて、心しん配ぱいしていなさるだらうと思おもうと、私わたしは胸むねがふさがるような気きがしました。

「さあ、この峠とうげを越こすと、もうじきだ。」と、おじいさんはいいました。

どんなところへゆくのだらうと、私わたしはそればかり思おもわれて、心しん配ぱいでなりませんでした。

やがて峠とうげを越こすと、三けん、四けん軒けんの古ふるい粗そ末まつな家うちが建たっていました。おじいさんは、その一けん軒けんの家うちに私わたしを連つれて入はいりました。すると、

そこには肌ぬぎになつて、おおおとこ大男が四、五人で、はな花がるたをしていました。そして、おお大きな目をむいて、けんめいにかるたをとつていました。

「こんな子供をつれてきた。」と、おじいさんは、みんなに向かつていいました。けれども、だれも相手にならず、かるたのほうに氣を取られて夢中になつていました。

「どれ、湯に入つてこよう。」と、おじいさんはいつて出てゆきました。

そこは沸かし湯の湯治場であつたのです。わたしひと私は独りすわつて、このものすごい室の内を見まわしてました。まだランプも、電で燈もなく、ただ古ぼけた行燈が、すみのところおに置いてあり

ました。わたしは心で、これはきつと悪者どもの巢窟であると考え

えました。そして、この間に逃げ出さなければならぬと思いまし

た。私は、よくそのときのことを覚えています。このとき、按摩

が笛を吹いて家の前を通りました。

私は決心をして、男どもに気づかれぬように、そつと室を出

て、下駄をはきました。そして、だれか見ていぬかと四辺を見ま

わしますと、勝手もとのところで、まだ若い女が、白い手ぬぐい

をかぶつて働いていました。私は、その女の人がなんとなくやさ

しい人に見えましたので、そのそばへいつて、

「小母さん、どうか私を家へ帰しておくれ。」と、泣いてたもと

にすがりました。すると、やさしそうなその女の人は、じつと私

の顔かおを見てみいましたが、

「知しれるとたいへんだから、早はやく私わたしにおぶさり、あのおじいさん
のいないまに逃にげなければならぬから。」と、女おんなの人はいって、
白しろい手てぬぐいをとつて、その手てぬぐいで、私わたしの顔かおをわからぬいよ
うに隠かくしました。私わたしは、目めをふさがれて、女おんなの肩かたにつかまり、そ
の脊せにおぶさりますと、女おんなはすぐおとにそこから音おとのしないように歩ある
き出だして、きたときの峠とうげを下くだりました。

やがて女おんなは二、三丁ちようもくると、息いきをせいて、私わたしを下おろして休やすみ
ました。けれど、まだ私わたしの目めから手てぬぐいはずしませんでした。
「わたしは、みんなに知しれるとひどいめにあいますから、ここか
ら帰かえりますよ。坊ぼつちゃんは、いまあつちからくる馬うま方かたに頼たのんで

あげます。」と、女おんなはいつて、ガラガラと馬うまに車くるまを引ひかせてきた馬方うまかたに、なにやら小聲こごえで女おんなはいつていました。

「また、達者たっしやだつたら坊ぼつちやんにあいますよ。けれど、だれかがとつてくれるまで、独ひとりで手てぬぐいをとつてはいけませんよ。」と、女おんなはいつてました。私わたしは、黙だまつてうなずきました。そしてなんとなく、このやさしい女おんなに別わかれるのが悲かなしゆうございました。

私わたしは車くるまの上うへに乗のせられて、長ながい間あいだ、知しらぬ街道かいどうをガラガラと引ひかれていつたのであります。どんなところを通とおつたか、どんな景色けしきであつたか、目めを隠かくされているので、すこしもわからなかつたのです。そして、あるところに来きたときに、

「ここだ。」といつて、馬方うまかたは車くるまを止とめ、

「さあ下りた。そして、すこしここに立って待っているのだ。」
 といつて、私を抱き下ろしてくれました。

私は、いわれるままに立っていました。そのうちに馬方は、
 馬を引いていつてしまいました。ガラガラと車の音は、しばらく
 遠くなるまで私の耳に聞こえていました。

いつまで待っても、いつまで待っても、だれもきてくれなかつ
 たのです。私は、ついに悲しくなつて泣き出しました。大きな声
 をあげて泣き出しました。すると、だれかきて、私の目かくしを
 取ってくれました。

見ると、それは私のおとうさんで、私は村はずれの大きな並木
 のかげに立っていました。

日は、もうとつくに暮れていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年7月

※表題は底本では、「子供《こども》の時分《じぶん》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供の時分の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>